



教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月16-17日開催)



本年度のフォーラムは、昨年度に引き続き「新しい時代の教育実践をめざして」を全体テーマとして二日間開催し、参加者数はのべ223名であった。1日目は「子どもの生活実態から考える学校の役割」をサブテーマにシンポジウムを実施し、基調講演、調査報告、実践報告の後、質疑やグループ討議を通して参加者相互の学びを深めた。2日目は「教育実践研究成果報告会」としてポスター発表と総評を行った。大学院生のポスター発表は28本、附属学校園・大学教員の研究発表は23本あり、各発表コーナーではそれぞれの提案に対する様々な視点からの問いかけや意見、それらへの応答が展開されていた。二日間を通して「子どもの実態から考える」必要性と重要性に改めて意を強くした有意義なフォーラムとなった。

【プログラム】

- 11月16日(土) シンポジウム—子どもの生活実態から考える学校の役割—
13:00~15:45
基調講演「学校プラットフォーム—教育・福祉、そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう—」
山野 則子氏(大阪府立大学教授)
調査報告「長崎県子どもの生活実態調査」から見てくるもの
小西 祐馬氏(長崎大学教育学部准教授)
実践報告「長崎におけるスクールソーシャルワーク実践」
法澤 光毅氏(長崎市教育研究所指導主事)
- 16:00~17:30 グループ討議・発表
- 11月17日(日) 教育実践研究成果報告会
—子どもの実態把握と未来を見据えた教育実践—
9:00~10:25 ポスター発表(附属教員・大学教員等 23本)
10:35~12:00 ポスター発表(大学院生 28本)
12:00~12:30 総評

ポスターセッション



シンポジウムの概要

本年度のシンポジウムは、「子どもの生活実態から考える学校の役割」をテーマとして、3名のシンポジストから基調講演、調査報告、実践報告をしていただいた。まず大阪府立大学の山野則子教授から「学校プラットフォーム—教育・福祉、そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう—」と題して基調講演を行っていただき、学校をプラットフォームとして、子どもの実態を踏まえ様々な関係者・関係機関がチームとして動くことの大切さなどをお話しいただいた。次に本学教育学部の小西祐馬准教授が「長崎県子どもの生活実態調査から見てくるもの」と題して調査報告を行い、「子どもの貧困」問題の認識を深め、支援を充実させることの必要性等が述べられた。最後に長崎市教育研究所の法澤光毅指導主事から「長崎におけるスクールソーシャルワーク実践」と題した実践報告を行っていただき、長崎市SSW派遣事業について具体的な取組を紹介していただいた。質疑応答の後、参加者同士で「教育・福祉」の観点からグループ討議と発表を行い、学校の役割や学校ができること等について各自の経験を出し合ったり意見交換を行ったりした。「福祉」をテーマにしたシンポジウム及び討議等を通して、子どもの生活実態や福祉機関等との具体的な連携方法等について多くの学びが得られた有意義な時間となった。



管理職養成コース 青木 大祐
管理職は、未来に対応できる学校をつくるために、自校の現状を基にしたビジョンの設定と人材育成、保護者や地域等との連携、働きやすい職場づくり等の実践、検証を考えていく必要がある。ポスターセッションでは、これらのことについて研究したこれまでの成果を発表し、院生や大学教員等と議論しながら、自身の研究を見つめ直し、管理職の資質や職務について深く考えたりすることができた。非常に価値のある時間を過ごすことができた。「早く実践したい」という思いを強く抱くことができた。今後、子どもや職員等、学校に関わる様々な人々のために研究の成果を生かした実践を積み重ね、理論と実践の往還を図っていきたく思った。

子ども理解・特別支援教育実践コース 次山 萌
今回初めて教育実践研究フォーラムに参加して、様々な角度から教育について考える機会を得られた。ポスター発表では、自分の希望する校種に関連ありそうな様々な研究内容を見つけた。どの研究も参考になるものばかりで、中間発表で聞いた研究内容から発展しており、自分が今後取り組みたい研究や教師になった際に役に立つ研究や実践内容が豊富であった。子どもたちへの支援や教育が子どもから求められている手立ては、子どもの発達段階と実態を考慮して取り扱う必要があること、また、子どもを取り巻く環境は、子どもたちが進むベクトルの方向や長きにわたって大きく影響していくことが分かる研究内容だった。今後の自分の研究や教職人生に役立てたい。

教科授業実践コース 太田 一成
ポスターセッションを通して、様々な校種や教科の発表をお聞きすることができ、とても勉強になった。自分が専門としている校種や教科のことについて学びを深めるだけでなく、このような機会に様々な校種や教科の研究をお聞きすることで、自分に足りていなかった視点や新たな考え方を発見することができた。発表者の方々の溢れるばかりの思いや工夫が詰まったポスター発表を見たり聞いたりする中で、発表者の方に質問に答えたりする機会もあって、自分の研究の進捗や課題を共有することができた。来年は、発表者として先輩や先生方の研究から学んだことをしっかりと生かしていきたいと思う。

学級経営・授業実践開発コース 山本 真太郎
ポスターセッションでは、大学院生、大学教員、附属学校園の先生、公立校の先生、教育センターの方等と共に議論した。様々な視点の切り口から新しいものの見方や考え方が自分の中に入ってきた。多面的・多角的に研究を見ることで学びの深まり方が変わったと感じた。特に私が所属する学級経営・授業実践開発コースのポスター発表の議論を通じて、自身の研究に活かせる部分や学びが広がってきたと感じた。新しい視点は従来の固定観念に風穴をあけると思う。セッションという議論の交流の中から、私たちの研究は飛躍的に良いものへ変換していくことを感じた。今回のポスターセッションで得た新しい見方や考え方を大切に今後の研究につなげたい。

管理職養成コース 永江 寛幸
昨今、子どもの貧困が社会問題としてメディアに取り上げられるようになってきた。しかし、世間の見方はまだまだ厳しく、貧困世帯の自己責任を容認する意見が少なくない。講演では、実態調査の結果から現在の高校生世代の保護者の3分の1が、近所に話し相手もおらず、育児モデルがない状態で子育てを行ってきたこと、社会全体で孤立が進んでいることがわかった。前述の貧困世帯が経済的な問題と社会からの孤立により貧困化が加速していることがわかった。この孤立を受け止めて、制度的な支援とともに大阪府が進めている学校プラットフォームのような組織づくりも、「福祉」、地域、学校が互酬性を保ちながら進めていかなければならないと感じた。

教科授業実践コース 溝上 美由希
シンポジウムでは、教育と福祉との関連という視点から、現場で子どもたちと向き合うときには、教室の中で見せる姿だけではなくそれぞれの後ろにいる保護者や家庭と向き合える必要がある。児童理解・生徒理解という点で福祉の視点も必要不可欠であるのだからという考えを強く感じた。学校として「できること」「できないこと」を把握し、必要な支援や手立てをいかに子どもたちに対して届けていくかを学ぶ貴重な機会となった。

学級経営・授業実践開発コース 古賀 きらら
附属ポスターセッションでは、子どもが目的意識をもって学ぶことが出来るための授業構成・教材に関する工夫や、学んだことを子ども自身で実社会につなげて考えたり、実社会で生かそうとしたらという手立てが見られた。そのどれもが子どもが主体で考えられていて、子どもに対する思いや期待が込められていた。私はポスターセッションを通して、常に子どもの可能性を最大限に引き出そうとする、教師としてのありたい姿を学んだ。大学院生として学ぶ中で、学校現場での授業づくりの厳しさや困難さを感じていたが、教師として子どもたちの未来を見据え、目の前の子ども一人一人と向き合っていくことの大切さを改めて感じることができた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 中村 華子
特別支援教育についての発表では、子どもたちの現在の実態と将来の姿が考慮された目標や指導・支援方法が設定された実践研究があった。子どもたちがより豊かに、安心して生きていくために、将来の姿をおもんばかって教育にあたることの重要性を実感した。また、実践の妥当性や信頼性がデータ比較や情報収集等によって明示されている研究が多く、根拠のある教育を現場で行っていくために必要な方法を多く学べた。特別支援教育に深く関わっている現場の先生もいられており、実態やニーズの異なる子どもたちの例を教えていただいた。多くの分野の方々の意見を聞いたり、話したことで、新たな視点を獲得する楽しさがあり、学びができたのだと実感した。

学級経営・授業実践開発コース 土手野 佑介
発表の中には私の目指す研究に近い内容があり、大変興味深く、是非ともお話を聞きたいと思った。多くの仲間と語り、質問し合うことで自分の研究を深めることができるのがフォーラムの良さであると感じた。また、これまで知っていた方も、その方がどういった理念をもとにして研究をしているのかわかる機会があった。ポスターセッションを通して多くの研究に触れ、知見を得ただけでなく、思考の幅が広がったように感じた。大学院に来て、学ぶことの楽しさを改めて感じる。今回の学びは、自分の研究の意義を再確認するとともに、自身の研究の課題を見直すことができた。今後も意を引き締めて研究を進めていきたい。

教科授業実践コース 中村 賀策
ポスターセッションでは大学院生だけでなく、大学教員や附属学校園の先生方の研究発表もあり、様々な校種、教科についてのポスターを見て回することで、それらに共通する大事な部分や、校種・教科特有の課題を知ることもでき、小学校教育を専攻する身としては大変興味深く学ぶことができた。何よりも、大学教員、現場の先生方、大学院生の他にも教育に携わっている方々が大勢集まり、一つの研究について議論を交わすことで、発表者・参加者の両方にとって視野を広げるとても有意義な機会になったと思う。これから研究を展開する私にとって、先輩方の研究内容や方法を知ることができ、大変参考になった。今回の経験を活かし、自身の研究も有意義なものとした。

教科授業実践コース 寺田 よしみ
シンポジウムでは、現代社会における子どもを取り巻く諸問題をデータという形で統計的・分析的に知ることができた。また、教職課程で学ぶ間は、教育についての知識やどう教えるかといった授業実践に関心が向いてくるが、現場に入った日から教育福祉に直結する問題に直面することになるのだと実感した。グループ討議において、「学校ができること・できないこと」の主題に対して様々な視点からの意見が出された中で、特に事例に基づく福祉に関する行政機関の知識などが非常に貴重で多くあった。これからは、担任が一人で抱え込むのではなく、チーム学校として地域と連携・協働し、子どもたちを守り育ていく必要があると感じた。

学級経営・授業実践開発コース 朝長 紗英子
基調講演では、大阪府立大学スクールソーシャルワークセンターの長官である山野則子先生に子どもたちの貧困についてお話しいただいた。子どもを取り巻く課題として、貧困や孤立が見えないこと、就学後に各機関で協働・検討する仕組みがないこと、福祉・学校・地域を結ぶ取組が不明確であることが挙げられた。孤立や貧困が問題行動、虐待の原因となることも多い。早急な解決が必要とされている。実践報告では、長崎市教育研究所の法澤指導主事によるスクールソーシャルワーク実践や長崎大学の小西准教授による「長崎県子どもの生活実態調査」に係る提言をもとに、子どもの置かれた養育環境の現状を知り、解決策を議論する機会となった。